
Fate/stay night XILLIA～マクスウェル戦記～

ユーリ・ローウェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / s t a y n i g h t X I L L I A (マクスウェル戦記)

【Nコード】

N1819Y

【作者名】

ユーリ・ローウェル

【あらすじ】

ガイアスとの闘いの後、ジュード達の前から姿を消したミラ。ミラはその後、四大精霊に匹敵する精霊の気配を感じてそこに向かうが、何故かサーヴァントとして召喚されてしまう。しかも隣にはもう一人。そう、セイバーサーヴァントはこの瞬間、二名現れてしまう。彼女達が待ち受ける困難はここから始まるのだった。

第一戦・精霊の主現る（前書き）

皆さんのFateの小説を読んで書きたくなって執筆してしまいました。今回は久々にネタではなくシリアス系の予定になりますね。

クロスはエクシリアのミラと。実は自分、まだジュード編しかクリアしていないのであまりミラ編の事は分らない所がありますがまあ、頑張っていきます。

同時にカーニバルの方もちゃんと執筆はしますので安心して下さい。

第一戦・精霊の主現る

一月のある日、ここはとある県にある冬木市。今現在、武家屋敷見たいな家で赤毛の青年が全身青タイトの男の襲撃を受けていた。

「ほう…魔術師の割には中々面白い事をするじゃねか…だが!!」

青タイトの男は赤毛の青年を蹴り飛ばす。青年はとても人間が出せない威力の蹴りを喰らい、家から少し離れている土蔵まで吹っ飛ばされる。

「がはあ…」

青年は何とか意識を飛ばさないようにとしながらそのまま土蔵の中に入る。

「もしかすると、お前が七人目のマスターだったかもしれないな。だとしてもこれでお終いだ」

青タイトの男は一瞬で土蔵にやって来て、右手に持っている赤い槍

を青年に突き付ける。

「じゃあな坊主。今度は迷うなよ…」

（死ぬ…俺は死ぬのか…俺はまだ何も出来ていない…フザケルナ…俺はまだ正義の味方になっていない。俺はこんな所で死ぬわけにはいかない！！）

青年が迫りくる赤い槍を見つめながらそう、強く願う。すると、青年の下から強烈な光が発生する。

「な、なんだこりゃ！」

青タイトの男は一瞬、槍の速度を緩め。次の瞬間、金属音大きく響いた。青年はおそろおそろ目を開けると目の前に二人の女性が立っていた。

二人は金髪、その内の一人は青い服の上から甲冑を着ている。もう一人は冬なのに露出が高い服、特にミニスカが今にも見えそうで青年は少し赤面していた。

「ちっ、七人目かよ…」

青タイツの男は後ろに下がり土蔵から出て行く。そして、甲冑を着た女性が青年の方を向き。

「問おう、貴方が私のマスターか？」

青年はその美しすぎる女性…少女に目を奪われていた。

「サーヴァント、セイバー。召喚に応じて参上した…ところでお前は何者だ？」

セイバーは隣にいる女性に問いたです。

「ふむ。こう言うときは私も名乗った方がいいのだろう。私はミラ・マクスウェルだ。私も一応セイバーとしてこちらに来てしまった身だ。呼ぶ時はミラで構わない」

「なっ、あなたもサーヴァントなの…」

「どうやら、のんびりおしゃべりをしている暇は無いようだ」

ミラと呼ぶ女性は土蔵の外を見るとそこには槍を構えている青タイツの男の姿があった。

「ちっ…いったいどうなってやがる。何故セイバーが二人も居るんだ？」

「さあな。だがお前は私の前で武器を構える。なら敵ということだな」

「そうだ、ぜ!!」

青タイツの男の槍がミラに襲いかかるが、ミラは腰に掛けてある剣で槍を全て捌く。

「セイバーの名前は伊達じゃねえか。なら…」

青タイツの男は赤い槍を下段に構え、目つきを一段と鋭くさせ、途轍もない殺気を放つ。

「宝具をしようするつもりです!!」

セイバーが青タイツの男のやろうとした事をいち早く分かり、ミラに警告する。

「ふむ、確かにあれは厄介そうだな」

ミラは青タイトスの男に斬りかかるが…

「おせエ…死棘の…」

青タイトスの男は次のアクションを起こしていた、間にあわないと感じたミラはとっさに剣を地面に刺して。

「グレイブ」

「なっ!!」

青タイトスの男の真下から地面が盛り上がり、青タイトスの男は空中に放り出された。

「ハアアア!!」

その隙を逃すまいとセイバー空中に跳び、青タイトスの男に斬りかかる。青タイトスの男も何とか空中で体勢を取るとセイバーの攻撃を槍で捌いて地面に着地する。

「あなたの槍捌き、ランサーのサーヴァントですね。しかも赤い槍グレイ・ボルグに死棘の槍と言う事は…」

「ちっ…まさか宝具を発動出来ず、更に正体を知られちゃった。だが、二人のセイバー。これは中々面白い展開になって来たんじゃないか。最初はハズレくじを引いたと思ったがこれはこれでついてるかも知れえ」

青タイツの男：ランサーは何処か嬉しそうな表情で言う。そしてランサーは二人から背を向けた。

「逃げると言うのですか!？」

「マスターの指示って言うのもあるが、今は完全じゃねえんだなこれが。だから一旦引かせてもらうぜ」

ランサーはそう言って空高く跳びあがって行った。その後をセイバーが追おうとするが。

「よせ、今行ってももう遅い」

「くっ…」

ミラがセイバーの腕を掴んでそれを阻止させた。そして、土蔵からよろよろと赤髪の青年が現れる。

「お、お前達は一体何者なんだ？」

「私達は聖杯戦争と呼ばれる戦いに参加するために召喚されたサーヴァントです」

「聖杯戦争って何だ？」

赤髪の青年がセイバーに質問、セイバーは赤髪の青年に分かりやすいように説明する。

「そして、あなたもその戦に参加する一人に選ばれたのです」

「なあ！！」

青年が説明を聞き、そしてその戦いの参加者の一人として選ばれた事に驚いていた。

「ふむ…」

「どうかしたのですかミラ？」

「いや、私はその聖杯戦争？って言うのは初めて聞くぞ」

「なっ！！では貴方は何故ここにいるのですか？」

「ああ。ここらへんから大精霊の気配を感じてな。私はその調査でここにやってきた」

「「精霊？」」

ミラは夜空を見つめ何か納得したかのように頷き視線を二人に戻す。

「ふむ、なるほど。どうやらここは私がいたリーゼ・マクシアとは違う世界ようだ」

ミラは語る。自分が精霊の頂点的な存在マクスウェル。そして、精霊や四大精霊事等を簡単に説明する。

「だが安心しろ、セイバーのサーヴァントとして召喚された以上、君は私が守ろう。ところで君の名何と言うのだ」

「衛宮士郎だ」

「そうか、シロウと言うのだな」

ミラは優しく青年に良い、青年の肩にポンッと手を置く。

「むっ、外にサーヴァントの気配が!!」

すると、セイバーは家の塀を跳びこえて何処に行ってしまう。

「シロウはそこで待っている。私がセイバーを探しに行く」

ミラは衛宮士郎にそこにいるように言うと、家の入口から外に走り出す。実際にはセイバーをすぐに見つけた、それは家の塀の近くの道路にいたのだが、セイバーは今まさに赤いコートを着た少女に斬りかかろうとしていた。

「くっ、なぜ邪魔をするのです」

「おちつけセイバー」

赤いコートの少女が今まさに斬られようとした瞬間、ミラがギリギリその間に割り込み、剣でセイバーの攻撃を受け止めていた。

「セイバー止めるんだ!!」

「シロウ、あなたまで…」

「ふうシロウ。私はあそこで待ってると言った筈だが…はあ。君はどうやらジュードに似ているようだな」

セイバーは何処か納得していないような感じで、ミラは士郎を見て呆れていた。

「そろそろ剣を納めてくれるかしら？」

すると、赤いコートを着た少女がそう促し、士郎はその声の主の顔を見て驚く。

「お、おまえ。遠坂」

「こんばんわ衛宮君」

第一戦・精霊の主現る（後書き）

ミラの設定は少ししたら出そうと思います。次はバサカ（マツチヨ）との闘いまで行きたいと思います。

第二戦・狂戦士（前書き）

バサカさんと幼女さんの登場です。

第二戦・狂戦士

「と、遠坂。お前何でここにいるんだよ」

「私もマスターだからに決まってるんじゃない。所で衛宮君、片方の鎧の子がセイバーって言うのは分かるけど、もう一人は？」

遠坂と呼ばれる少女はミラを見て言う。

「私もセイバーのサーヴァントだ」

「え…うえええええ。何で同じクラスのサーヴァントが二人いるのよ…!!」

「だが、私の事はミラと呼んでくれ」

驚いている遠坂だが、それをスルーしてミラは彼女に名前を名乗る。そこで、可笑しくなりそうな思考を戻してミラに問う。

「ちょ…あなたそれ真名でしょ？いいのかしら、敵のマスターに真名を名乗って？」

「ん…？真名…と言うのはよくわからないが。私の名前は。ミラ・

マクスウェルだ」

（いや…何でこの人遠坂の警告見たいのを無視して名乗ったんだろう？）

士郎は心の中でそう思っていた。ミラのんびりとしながら自分の名前のフルネームを言う遠坂は啞然として見るが、すぐに顔を引き締める。

（ミラ・マクスウェル…そんな名前聞いたこと無いわ、一体何者なの？）

遠坂はミラの全身をじっくり観察する。

（それにしても凄いスタイル良いわよね…それにあの頭のぴよんってなってる奴何かしら…）

割と、どうでもいい所を観察していた。

「くっしゅ…」

ミラが急にくしゃみをして鼻水を鼻の下あたりに出してしまった。た。

「ちょっ、ミラ大丈夫かよ」

「うむ、だいじょぶだ」

鼻をずるずるさせて言うミラだが、その光景に説得力など微塵も無かった。

「そうね…一旦家に上げて貰えるかしら？衛宮君に色々と説明しなくちゃいけないし。それに、彼女の格好、とっても寒そうだし」

遠坂が言って士郎とセイバーはミラの格好を見て納得する。そして四人は家の中に入ると。

ぐるるるるゝ

如何にも、お腹が空いていますよって言わんばかりに音が家の玄関内を響かせる。

「え…今の音って…」

「済まない私だ。お腹が空いたようだ、ふふお腹と背中がくっつい

て…」

音の発生源はどうやらミラだったようだ。

「じゃあ俺何か作ってくるよ、ついでにセイバーと遠坂も食べるか？」

「はい、よろこんで」

「ええ。じゃあ頂こうかしら」

二人の返事を聞いて士郎は台所に行った。三人は士郎の後に続き、居間の畳の上に腰を落とす。

「そう言えばまだ二人に名乗って無かったわよね。私は遠坂凜、アーチャーのマスターよ。それに、一応この冬木市のセカンドオーナーでもあるわ」

「オーナー…と言う事はここを統べるもの…と言う事だな？」

「統治はしてないけど、管理者って意味ね」

「ではリン。最近、この辺り周辺に何か大きな力など感じたりはしなかったか？」

「大きな力…いいえ、分からないわ」

「そうか…」

真剣な表情で会話をしているが、その間にもミラはお腹の音を鳴らしていた事を言っておこう。

「出来たぞ、急いで作ったからチャーハンしか作れなかったけどな」

「ふーん、衛宮君って意外に料理上手なのね。じゃあお手並み拝見
って事で、いただくわ」

「私はもう限界だ…」

「では、私もいただきますしょう」

三人の女の子は同時にチャーハンを食べた。

「ふむ、シロウ。君は中々やるな、とてもおいしいぞ」

「ええ。とてもおいしいです」

ダブルセイバーはどうやらご満足の味だったようだが…

「よし、これならまだ私の方が」

凜は一口食べて拳をグツとさせていた。

「衛宮君、確かに貴方の料理はおいしいけど。まだ私の方が旨く作れるわよ」

「へー遠坂も料理出来るんだ」

「当たり前よ、特に中華は得意よ」

「俺は一応、和洋中と出来るけどな。俺もまだまだって所だな」

三人は手早くチャーハンを食べ終わると士郎は食器を片して居間に戻る。

「さて、これからあなた達に行って欲しい所があるの。私が案内するからついて来て…と思ったのだけど…」

ここで凜は言葉を止める、その理由はダブルセイバーに原因がある。まずはセイバー、彼女の格好は未だに甲冑姿、こんな姿では幾ら夜と言え目立ってしまう。次にミラだ、彼女にいたってはとても冬での格好では無いからだった。

「どうしたのだリン？」

「ねえ衛宮君。この家に何か服とか無い、彼女達に着せる奴とか」

「ちょっと待っててくれ」

士郎は居間から出て行き、服を探しに行く。数分して士郎は二着の服を持ってくる。

「セイバーはこれが似合いそうだな」

「これは…では着替えてきます」

士郎が渡したのは黒い男用のスーツだった。セイバーはそれを何処か懐かしそうに手に取り、隣の部屋に着替えに行く。

「そして、ミラはこれかな」

次に、ミラに渡したのは白いロングコートを渡した。

「助かるぞシロウ、そうだな…私も少し服装を変えよう」

すると、ミラは一瞬で服装を変える。その服は上下、白と青を基調とした長袖長ズボンになっていた。言わばスタン風の鎧無しの格好

だ。

「今度、二人にちゃんとした服買ってあげないとな」

「お待たせしました」

セイバーも黒いスーツを来て居間に現れた。

「じゃあ行きましょう」

四人が向うのは新都にある教会、どうやらそこに聖杯戦争の監督役がいると移動中に凜が話す。そして、四人は協会に着く。

「じゃあ衛宮君と私は中に入るから」

「私達は外で待っていよう」

士郎と凜は教会内に入り、外にはセイバーとミラの二人だけになった。

「ミラ、貴方には何か叶えたい夢とかあるのですか？」

「夢：生憎、私は夢はない。だが、しいて言えば私は世界を平和になればと思う」

「それは何故ですか？」

「それが私の使命：マクスウェルの使命だからだ。そう言うセイバーは何かあるのか？」

「私は：ただ、やり直したい。それだけです」

セイバーは悲しい表情でいい、ミラそれを見てあえて何も言わなかった。

「そうだセイバー。これを渡しておこう」

ミラはセイバーにビー玉見たいのを手渡す。

「これは一体：？」

「それはリアルオーブと言って、私の世界で使われているものだ。それを持っているだけで戦闘中にリンク共鳴が出来る」

「そうですか。ではありがたく貰っておこう」

そこに、教会から士郎と凜が出てきたが、士郎の表情が険しかった。

「シロウ。顔色が悪いが大丈夫か？」

「あ、ああ大丈夫だ。それより帰ろう」

四人は来た道を引き返すが、途中で凜が立ち止まる。

「衛宮君。私が世話してあげるのはここまでよ」

「…そうだな。俺達はマスター同士、いわば敵同士なんだよな」

「へー意外にしっかりとしてるわね。じゃあ次に会った時はお互い全力で戦いましょう」

「ああ、だが遠坂。一つ言わせてくれ」

「ん…何よ？」

「ありがとうな。俺、お前のこと結構好きだぞ」

「なっ…アンタいきなり何恥ずかしい事言ってるのよ」

「ふむ、シロウは意外に大胆なのだな」

「ええ。見直しました」

士郎にいきなり好きだと言われて赤面する凜。当然、士郎はそう言うつもりで言ったのではないのだが…

「あら、もう帰っちゃうの？」

そこに、第三者の声が聞こえる。四人は声が聞こえた方向を向くと、そこには幼女が一人立っていた。

（エリーゼと同じ歳のように見えるが…なにか違うな）

（あれは…まさかアイリスフィールの…）

ミラとセイバーはそれぞれ違う事を考えていた。

「アンタ…もしかして。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン？」

「ええそうよトオサカリン。そして初めまして皆さん、私はバーサーカーのマスターでもあるのです」

その瞬間、四人は途轍もない殺気を感じ、セイバーとミラは士郎と凜の前に立つ。

「これが私のサーヴァント。おいで、バーサーカー」

すると突然、上空から大男が現れる。その男は青い髪に筋肉モリモリとまさにバーサーカーの名前にふさわしい男だった。

「ようお前…この俺の渴きを潤してくれる存在だな…」

バーサーカーのその圧倒的なまでのプレッシャーが四人を襲う。セイバーとミラは剣を抜き、構える。

「行くぞ…ぶるあああああああああああ！！」

バーサーカーは巨大な斧を片手に持ち、二人に向かって吠えながら突進してきた。

これが、聖杯戦争第一戦の始まりだった。

第二戦・狂戦士（後書き）

バサカさんはバルバトスでした：あれ、どうしてこうなったんだろう？

でも、これで聖杯戦争の難易度を上げたと思います、たぶんマニア位？

バルバトスはギルの対抗馬的存在、いや、圧倒する存在ですね（笑）

そして、ミラとセイバーの服装。

ミラ・永劫の英雄

セイバー・麗しい美男子

次回、バーサーカーとの本格的な戦いに入ります。

能力設定（前書き）

能力設定です。話が進むにつれて更新していく予定です。

能力設定

（能力）

ミラ・マクスウェル

クラス・セイバー

マスター・衛宮士郎

性別・女性

属性・火・風・土・水・光

クラス別能力

四大精霊

ミラが生まれた時から共に居る四つの精霊、そのどれもが大精霊であり一つ一つの力が世界に影響を与えるほど。

魔技

本来、召霊術には詠唱が必要だが。ミラは詠唱なしでも術を使える、ただし、その場合術のランクが一つ下がる。

剣技

ミラ自身、最初はまったく不慣れであったがアルヴィンとの稽古で様になり、強敵と戦って行く内にいつの間にか剣の技量が高くなる。技は旅の直後なので全て使える状態。

共鳴

ミラが元の場合、二人で敵を挟んだ時相手の動きを封じるバインドを発生させることが出来る。

その他にも共鳴をしている時、技を同時に繰り出すと強力な技に昇華する。

宝具

ランク・なし

ミラは英雄と言う訳ではないのでそう言ったものは持っていない。ちなみに装備しているのはフェアソード。

秘奥義

ミラが四大精霊を同時に扱う技。この技は実際、周りに被害をもたらすため余り多様は出来ない。

補足・ミラは死んでいないためマスターである士郎から魔力供給を必要しない。

もう一人の少女

クラス・セイバー

マスター・衛宮士郎

性別・女性

属性・風・雷・光・闇

筋力B

耐久C

敏捷C

魔力B

宝具B

幸運A

クラス別能力

未だに正体が明らかにならないため不明。

宝具

?? ??

真の宝具

セイバー自身、まだ手にしていないがいずれは手にする物。

能力設定（後書き）

ミラの宝具についてなんですけど、思い浮かばなかったのになしにしました。その分、四大精霊が何とかしてくれるでしょう。

セイバーについては皆さん、すでに知っていると思いますがまだ話の中ではあまり明らかになっていないのであえて伏せておきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1819y/>

Fate/stay night XILLIA～マクスウェル戦記～

2011年11月4日12時57分発行